

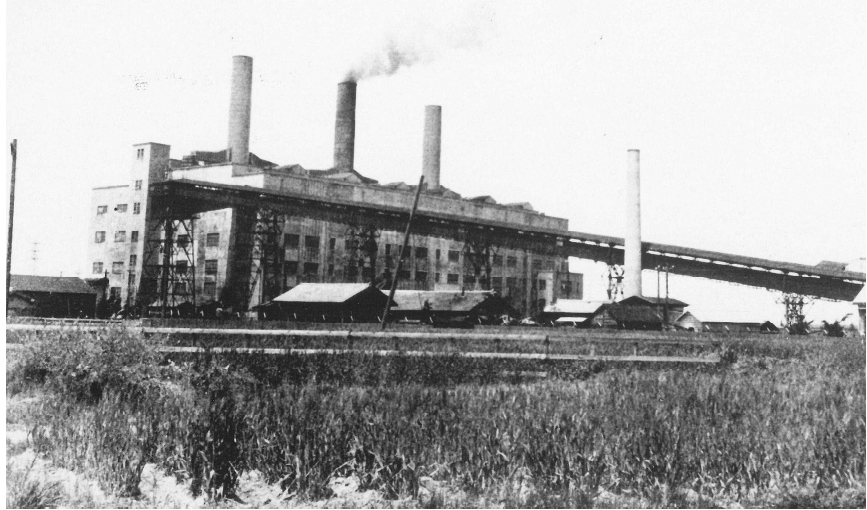
築港の3本煙突と親しまれた名港火力

一戦中戦後、名古屋の電力供給を支えた東洋一の火力発電所一

■築港の三本煙突

名港火力発電所は中部共同火力によって名古屋市港区一州町（旧競馬場）に建設された。戦前はそびえ立つ3本の煙突が遠くからも望まれ、「築港の3本煙突」と親しまれた。

中部共同火力は、1936年7月、東邦電力、矢作水力、日本電力、中部電力、大同電力など7社によって設立（社長：松永安左工門）された。1939年1月に運転開始し、1940年10月までに、13万8000kWの発電規模となった。完工にあたり、時の名古屋市長縣忍は、松永社長の雅号にちなみこの地を「一州町」と命名した。



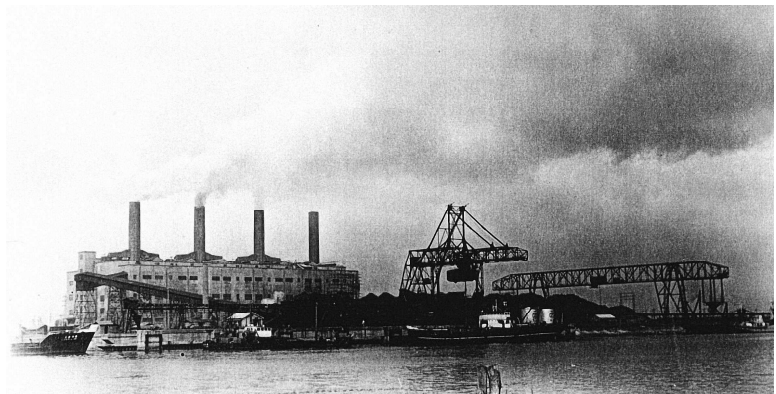
〔写真1〕 竣工時の名港火力発電所

写真：中部電力(株)蔵

■空襲被害・製塩事業・賠償指定の中で

名港火力は効率の高い最新鋭の発電所として、戦中・戦後の名古屋地区に電気を供給したが、戦時下の元で数奇な歩みを辿った。

戦争末期の1945年6月26日には、構内に爆弾が落ちて被災、終戦後工場需要が激減する中、1946年12月から3年間、余剰電力を利用して 電気製塩（年産1200トン）を行った。1946年8月から1952年4月の解除までの間、GHQの賠償指定を受けていた。



〔写真2〕 1952年頃の名港火力発電所

写真：中部電力(株)蔵

■戦後復興を支えて

返還後、中部電力は1952年11月に7号ボイラを増設して15万9000?になり、その後1954年1月に21万9000キロワット、1955

年7月に28万5000 kWに増設され、煙突は5本となった。このとき、松永安左工門が揮毫した「堂々圧海」が発電所内の記念碑となっていた。とりわけ4号ユニットは、全国に先駆けて、一缶一機のユニット方式を採用した。

戦後復興に大きな役割を果たした名港火力も、新名古屋火力はじめ新鋭発電所が次々に完成して運転機会が減り、1982年11月廃止された。現在発電所跡はゴルフ練習場や商業施設カインズとなっている。なお名港火力で使われていた1号タービンは知多火力の電力館前に展示されている。



〔写真3〕 5本煙突の名港火力発電所

写真：中部電力(株)蔵

（浅野伸一）